

献上博多織・人間国宝 おがわ 小川 きさぶろう 規三郎さん
 小石原焼・人間国宝 ふくしま 福島 ぜんぞう 善三さん

福岡県知事 小川 洋

平成30年11月、伝統的工芸品月間国民会議全国大会(※1)が福岡県で開催されます。伝統的工芸品に対する内外からの関心が高まる中、小川知事は、博多織の分野で人間国宝(※2)に認定されている小川規三郎さん、小石原焼の分野でこの度人間国宝に認定された福島善三さんと対談し、伝統的工芸品の魅力や制作へのこだわり、そして後継者の育成など、これからの伝統的工芸品産業について語り合いました。

※1：経済産業省が伝統的工芸品に対する国民の理解とその一層の普及を目指し、昭和59年から、毎年11月を伝統的工芸品月間と定め、全国各地で開催している大会

※2：芸能や工芸などの無形の「わざ」を高度に体得している個人のことを指し、正式には重要無形文化財保持者という



小川 規三郎

昭和11年生まれ 福岡市出身

小川規三郎さんの作品

父・小川善三郎のもと、伝統的な献上博多織の制作技法を習得。平成15年に人間国宝に認定。



福島 善三 (雅号であり、本名は福嶋善三)

昭和34年生まれ 東峰村出身

福島善三さんの作品

父・福嶋司のもと、小石原焼の制作技法を習得。平成29年に人間国宝に認定。

伝統的工芸品の魅力

知事：長い歴史の中で生まれ、受け継がれてきた伝統的工芸品は、私たちの生活に豊かさや潤いを与えてくれるだけでなく、日本の優れたものづくりを象徴する産業です。近年、外国人観光客が増加し、地域の魅力としても大きな役割を担っています。福岡県には、小石原焼、博多人形、博多織、久留米緋、八女福島仏壇、上野焼、八女提灯の7つの国指定の伝統的工芸品がありますが、両先生が考える伝統的工芸品の魅力について教えてください。

小川規三郎さん(以下、小川)：伝統的工芸品は、日用品の製造技術に由来し、古くから間違えずに受け継がれてきたものに、時代ごとの流行を乗せ、それが続いていくから「伝統」、そして「魅力」なのだと思います。途切れてしまえば歴史です。ですから、博多織も、10年前と今とでは、デザインや色、柄が全く違ってきています。

福島善三さん(以下、福島)：小石原焼も、350年の歴史の中で、昭和に入って伝わった比較的新しい技法である「飛び鉋」が小石原焼の特徴といわれているように、時代と共に流行に合わせて変わってきたという点が共通しています。

知事：伝統の上の「新しさ」。それが伝統的工芸品の魅力なんです。時代と上手く融和し、より良いものを作り、それが新しい伝統となっていく。毎年、小川先生が学長をされている「博多織デベロップメントカレッジ」で生徒さんの作品を拝見していますが、先生がおっしゃったように、博多織の

伝統的な技術や技法の上に、若者らしい新しいデザインや色、柄が毎回加わり、どんどん魅力的になっていますね。

これまで苦労した点、制作へのこだわり

知事：両先生が長年制作に取り組まれてきた中で、苦労された点、制作へのこだわりについてお聞かせください。

小川：私の師匠は父親ですが、ものすごく厳しい人で、何度もやめようと思いました。「そんなことにいつまでかかっているんだ」とでも言いたげに、私の方を見るだけで何も教えてくれなかった。今になって思うのは、教えてもらうのは簡単ですが、自分の身に付かないということです。試行錯誤して、自分で気付いて初めて身に付くのだと思います。

福島：小川先生が言われた試行錯誤と共通すると思いますが、私はいかに無駄をしたかがすごく大事だと思います。特に、焼物の場合、焼く前と後では全く形態が変わってしまいます。自分の力ではどうしようもないことなので、なぜそうなったのか、どこに原因があるのかを一つずつ考えます。

知事：窯から出てきたものが思い通りのものでなかったとき、なぜか、どうすれば良いかを考え、それを繰り返すことでより良いものが生まれるわけですね。

福島：他人がしないことをすると、先例が無いので、試行錯誤する分だけ無駄が多くなります。ただ、無駄や失敗は当たり前前と違い、失敗を反面教師としてやれば失敗ではなく